武装神姫 Lilycal Strikers

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武装神姫　Ｌｉｌｙｃａｌ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ３８４７Ｘ

【作者名】
三月語

【あらすじ】
ＲＡ同士の衝突で起きた光に飲まれた神姫達。目覚めたのは知らない力や知らないシステムがある世界。
その世界で、彼女達は新たな戦いに身を投じる・・・

武装神姫ＢＡＴＴＬＥ　ＭＡＳＴＥＲＳＭｋ２発売を記念して・・・

というかもう日経ってますけど、始めました！『神姫？どうせデバイスだろ？』なんて思ってる人には『なん・・・だと・・・・！？』と言わせます、言わせてみせます！・・・多分。

（警告タグは後々追加します、絶対）

ＲＩＤＥ００　神姫、消失（前書き）

予告通り始めました（１話も完成したので。後はちょいちょい手直しして・・・です）。

今回は今までの書き方と大幅に変わってます。ある意味新しい試みです。

・・・絶対に『なん・・・だと・・・！？』と言わせてみせるっ！！

ＲＩＤＥ００　神姫、消失

「てやぁっ！」
「当たるものか！」

廃墟、０と１で構成されたそのステージの上で戦う、四人の少女。
片方では白き鎧に包まれた少女―天使型神姫アーンヴァルＭｋ２―が、黒き鎧に包まれた少女―悪魔型神姫ストラーフＭｋ２―に切りかかるが、ぎりぎりの所で回避される。
もう片方では・・・

「てぇー・・・いっ！？」
「あ」
「みゅっ！？」
「・・・だいじょぶ？」

白を中心とし、ところどころにある青が映える鎧を纏う少女―戦乙女型神姫アルトレーネ―が猫っぽい少女―猫型神姫マオチャオ―に向かって突撃した所、盛大に転んだ。

「こうなったら最後の手段！これこそ、天駆ける天使の騎馬！」

アーンヴァルＭｋ２の背部兵装が形を変え、それに乗り上げる。

「グランニューレッ！！」

そして相手のストラーフＭｋ２も呼応するように

「殺戮の始まりだ・・・。砕けろ、ジャーヴァル・クルイク！！」

同じように背部兵装に飛び乗る。そしてお互いがお互いへと向かい始めた。

「わ、私だって！！やる時はやる神姫なのですーっ！！」

「そ、そんなやけっぱちになったらダメなのにゃ～！！」

突然やけを起こして突撃を始めたアルトレーネに対し、逃げ始めたマオチャオ。

そして、そんな二人の上側で固有レールアクションを発動した二人の神姫が衝突した瞬間。

「ま、眩しいのにゃ～！！何にも見えないよぉ～！！」

マオチャオだけが感じた、辺り一面を覆うほどの眩しさが辺りを襲った。

そして・・・

「や、やっと見えるようになったよぉ～・・・あれ？」

マオチャオの視力が回復し、目を開けてみたら・・・

「あ、あれ！？リーハ！？あのアーンヴァルちゃんとアルトレーネちゃんは！？どこ行ったの！？」

マオチャオの敵であったアーンヴァルＭｋ２とアルトレーネ、そしてリーハと呼ばれたストラーフＭｋ２が姿を消してしまったのだ・・・

ＲＩＤＥ００　神姫、消失（後書き）

次回はいきなり初戦闘。相手はよくあるあの機械共。

ＲＩＤＥ０１　ＦＩＲＳＴ　ＢＡＴＴＬＥ、『あれ？これってなんです？機械人形ですか？（ｂｙエイル）』

「（あんばる２）私達は・・・絶対に負けません！」

「（レーネ）あのー、先輩？名前のとこ、平仮名表記になってますよ？」

「（あんばる２）えっ！？ちょ、マスターっ！！」

ＲＩＤＥ０１　ＦＩＲＳＴ　ＢＡＴＴＬＥ、『あれ？これってなんです？機械！

ついに本編開始です！なんとなくお待たせしました！

今回は白子とレーネの話です。

ＲＩＤＥ０１　ＦＩＲＳＴ　ＢＡＴＴＬＥ、『あれ？これってなんです？機械

「う・・・」

辺り一面誰もいない森の中、少女は目を覚ました。

「・・・ここは・・・それにあの光・・・」

きょろきょろと辺りを見回すと、その横に見慣れた存在が。

「え、エイル！？ちょ、ええっ！？しかもなんでなのかは分からないけど大きくなってる！？」

そして少女―アーンヴァルＭｋ２、名は『ヴァル』―は慌てて自分の体を見た。

（ヴァル：お、大きくなってる！？地面もいつもより遠くに見える！？）

そしてヴァルはパニックに陥った。本来彼女たち神姫の全長は１５ｃｍが基本。なのに今のヴァルの身長は１５０ｃｍと通常の１０倍ものサイズアップを果たしていたのだ。ついでに言うと、もう一人

の少女、アルトレーネの『エイル』の身長も、ヴァルと同じく１０倍の１５１ｃｍになっていた。

（ヴァル：えっと、確かマスターとマスターの彼女さんが練習試合として私とエイル、リーハとニッキ（↑一人取り残されたあのマオチャオである）とで戦って、リーハと固有レールアクションの撃ちあいになってぶつかって、そこから・・・どうなったんだっけ・・・？）

あの時のことを必死になって思いだそうとするヴァル。だが、リーハとの衝突直後から今に至るまでの記憶がごっそりとなくなっていた。

「（なんで・・・！？でも・・・今はそれよりもエイルを起こさないと・・・）エイル！起きて！」

ヴァルは横で眠るエイルを起こそうと体をゆすった。だが・・・

「ふぇへぇ～・・・もう食べられまひぇんよぉ～・・・♪」

完全に夢の中だった。しかも幸せそうな夢。一瞬、ヴァルも起こすのを躊躇ったくらいである。

「・・・ダメダメ！！こんなことで諦めてたら・・・っ！？」

ヴァルは何かがこちらに近づいてきていることを直感で悟った。そして未だに『お腹いっぱいれしゅ～♪』なんて言っているエイルを担ぎあげそこから離脱を始める。足音を立てずに、それでも急いで。

所変わって。

「次元震が起こるなんて・・・やっぱり驚いちゃったな。同時に2ヶ所も。」
「何度も起きているのは分かってるんだけど・・・あの地点で起きたのは初めてかな・・・？小さい方は前に起きたことあるけど。」

次元震が起きた、ということで二人の女性がその次元震が起きた現場へと飛んでいた。

次元震のことでちょっと言っていたのは『エース・オブ・エース』こと、空戦魔導師の戦技教導官、高町なのは。

その隣にいるのは彼女の親友で執務官のフェイト・T・ハラオウン。

「次元震が起きたってことは・・・次元漂流者がまた出たのかな・・・？」

「どうだろう・・・。・・・そろそろ・・・だったかな・・・」

二人は同じ速度で現場へと飛んでいった。

所戻してヴァル（＋エイル）。

「あーん！！もー起きてよエイルぅ！！」

ヴァルは必死になってエイルの頬を引っ叩いていた。それもそのはず、ヴァルが感じた気配が、自分たちを囲むように動いて言っていることに気付いたからだ。

このままエイルを担いでいては突破はまず不可能。自分がさっきまで使っていた通称『グランニューレセット』もなぜか消失、使えなくなっていることもそれに拍車をかけている。

そして通算１００打目を記録したその瞬間・・・

「ふにゃ・・・？ヴァルふぇんふぁい、らにあおひひゃんれふは？（訳：ヴァル先輩、何が起きたんですか？）」

エイルが目を覚ました。両頬が腫れてちゃんと喋れなくなっているが。

「気づいてなかったの!?とにかく、変な所に来ちゃって、それで何かよく分からないけどとにかく追われてて、今囲まれたの!!」
「・・・ふぁれ!?おおひふふぁっふぇる!?（訳；あれ!?大きくなってる!?）」
「気づくのそこ!?」

二人が簡単な漫才をやっている時に、二人を追っていた者が姿を現した（この間に、なぜかエイルの頬の晴れが引いた）。

「ぴぎゃ――――――――――――――――――――っ!?ゆ、ゆゆ、ゆゆゆゆ幽霊ですかぁ!?やっぱりユーレイなんですかぁ!?」
「・・・ピーナッツ?それともアーモンド?それが機械化したもの?なんだろ、あれ・・・」

現れた『もの』に対し、二人はそれぞれ悲鳴を上げたり首を傾げたり・・・

そしてそれは、不意打ちと言わんばかりに二人の方を向き、中央のレンズに光をため始めた。

「（・・・もしかして・・・私達を狙ってる!?）エイル、すぐにそこから飛び退いて!!攻撃が来る!!」

「えっ！？と、飛び退けってどこにですか！？」
「いいから早く！！」

ヴァルがエイルに指示した瞬間、そのレンズから光が放たれた。

「くっ！！」
「ひゃああっ！！」

『回避アクション』で回避し（ヴァルは側転、エイルはヘッドダイビング）、ヴァルはそのまま攻撃に転じた。

「てやっ！！」

アーモンド（ヴァル一時的に名称）にパンチ（バトルマスターズでは神姫に武器を持たせない状態でそのボタンを押すとパンチ攻撃になりますｂｙ作者）を繰り出す。が・・・

ガインッ！！

「～～～～～っ！」

側面を殴ったので無論硬く、殴ったヴァルの方にダメージ。

「せ、先輩！？」

いつの間にか体を起こしたエイルがヴァルに声をかける。

「か、硬い・・・」
「よくも先輩をーっ！！」
「ちょ、エイル！！無茶したらダメっ！！」

ヴァルの制止も聞かず、エイルはアーモンド（ヴァル一時的に（ｒｙ）にパンチを決めた。

レンズに。

「ダメ、硬さに負ける！！」

ヴァルがそう思った時だった。

ガシャン！！

『・・・え？』

ジ・・・ジジ・・・ドスン！！

『・・・えー！？』

レンズを殴られたアーモンド（ヴァ（ｒｙ）は2、3回ほど紫電が走ったと思ったら、落ちた。それも、あっけなくと言った感じで。

「・・・これなら！エイル！さっきと同じようにレンズを狙って！ただビームみたいなのに気をつけて！！」

「は、はい！！きゃああ！？」

返事をした矢先にビームが飛んで来て、エイルはそれを神回避。

「やり方が分かれば・・・武装がなくてもやれる！！たあぁ！！」

ヴァルはレンズだけを的確に殴り、機能を停止させていく。時たま飛んでくるビームも既に機能停止させたアーモンド（以下略）を盾にして防いだりした。

「くぅ・・・っ、弱点が分かったと言っても数が多過ぎる・・・！」

しかし、圧倒的な数の暴力に、押され始めた。

「せんぱ～い・・・倒しても倒しても涌いてくるのですぅ～・・・」

「このままじゃ・・・負ける・・・！」

ヴァルが諦め始めた時だった。

上空に何かが光ったような感じがしたその直後、ヴァルの後ろにその光が降った。癒しとかそういうものではない。とにかく高威力の光が『降った』のだ。

「・・・え・・・？」

ヴァルは今起きた光景が理解できないでいた。突然空から光が降ってきて、後ろにいたアーモンドを破壊したのだから。

ちなみにエイルは自分が叩いていたアーモンドに光が降ったため、腰が抜けて涙目になっていた。

「安全な場所に隠れていてください！！これは私達で対処します！！」

そして空から聞こえた声にハッとなって上を向いた時、二人の人間を見たヴァルであった。

（なのは・フェイトサイド）

「・・・いた！」

ヴァル達が戦い始めてからその数分後、なのはとフェイトがその近辺に着いた。

「次元震反応は確かここで会ってるはず・・・っ！」
「フェイトちゃん、この反応は・・・」
「うん・・・、間違いなくガジェット、しかも一般人もいる・・・！」

フェイトが襲われている人（ヴァル・エイルのこと）を視認した。

「・・・ちょっと待ってフェイトちゃん、あのガジェット・・・壊れてない？」
「壊れて・・・るね・・・。同じ場所をピンポイントで狙って・・・」

既に破壊されているガジェット（ヴァル達は未だアーモンドと思っている）

「押され始めた!?なのは!!」
「うん!」

フェイトの声になのはが杖を前につきだした。

「ディバイーン・・・・バスターっ!!」

そして杖から光が発射された。

「・・・当たった!!安全な場所に隠れていてください!!これは私達で対処します!!」

なのはは二人に退避を呼び掛けた。

これが魔導師と神姫の出会いであった・・・

ＲＩＤＥ０１　ＦＩＲＳＴ　ＢＡＴＴＬＥ、『あれ？これってなんです？機械

真面目だけどどこか抜けてる白子のヴァルと、超天然ドジっ子なエイル。二人がついに後の魔王と出会いましたよって。さて、どうなることやら・・・

次回
ＲＩＤＥ０２　リーハ、奮戦す

「（リーハ）次回はヴァル達の話が続くと思った人には悪いが、私の話になる。ヴァル達がどうなったか気になった人、すまないな。一応、私の活躍を期待していてくれ。」

ＲＩＤＥ０２　リーハ、奮戦す（前書き）

今回は別アングルでの話です。さて、一人別場所へ飛ばされたリーハ。彼女はいかに動くのか？それは本編で！！

今回はちょっとエグイ言葉があります（例：殺戮）。そしてある意味チート回です。それが苦手な人は引き返してください。

ＲＩＤＥ０２　リーハ、奮戦す

「・・・ここは・・・何処だ・・・？あたしは確か、バトルをしていたはずだ・・・」

先ほどとは全く違う風景。周りは草原。そこで一人の少女が目を覚ました。

青い短めのツインテールのその少女は、ヴァル、エイルと共に光に飲まれた、ストラーフ型Ｍｋ２のリーハである。

「・・・考えても無駄か。とにかくここを・・・っ！」

動こうとした時、何かの気配に気付いた。

「・・・少なくとも３０・・・一人で切り抜けられるか・・・？」

迫る何かを警戒するリーハ。一歩足を下げた時、首に何かが掛かっていることに気付いた。

「・・・何だこれは？こんなものをマスターから受け取った記憶は・・・っ！」

首にかかる十字架のネックレスに気を取られた直後、何処からか何かが飛んでくる。それを横っ跳びで回避するリーハ。

「・・・まったく。人の思慮をも邪魔するとは・・・」

そして現れる機械。

「・・・ビット・・・というわけではなさそうだな。一体・・・こいつは？・・・分かっていることは・・・」

そして、現れた機械から発せられる、多数のレーザー。

「あたしにとって、あいつらは敵、ということだけだ！さぁ、いくぞ！」

リーハは敵に向かって駆け始めた。正面、左右からレーザーが乱れ飛んでくるが、今迄で培ってきたセンスで掻い潜り、敵の内の一体に向かっていく。

「（・・・あいつらが撃つレーザーは、決まってあのレンズから放たれている・・・）・・・それなら・・・！」

短時間で敵の考察を済ませ、機械の真正面に辿り着いたリーハ。

「・・・沈め！」

レンズを殴りつける。レンズを殴られた機械はガシャンと盛大な音を立て、そのまま崩れ落ちた。

「弱点は分かった。が、同じことをし続けていたら流石に日が暮れるな・・・」

一瞬攻撃が止んだその刹那に息を整えた時だった。

【マスター、御手をお貸しいたしましょうか？】

「・・・誰だ？」

突然、機械染みた音声が聞こえた。

【あなたの胸元のネックレスです。名も無き存在なので、自己紹介しかねますことを御了承下さい。】

「・・・このネックレスか・・・。ちっ、のうのうと話をさせてくれないか・・・！」

ネックレスを摘んで見た直後、再びレーザーが飛んで来たため、それを回避。

【マスター、私に名前を頂けますか？】
「名前、だと！？こんな状況で考えつくものか！」
【安直なものでも構いません。】

（戦闘中に敵の考察以外の思考が働く訳が・・・仕方ない、我ながらセンスがないと思うが・・・！）

リーハは意を決したように、ネックレスに向けて言った。

「お前の名前は『トイフェルデュンケルハイト』だ！それでいいな！？」
【構いません、恐縮です。】
「で、デュンケルハイト！一体どうする気だ！？いつまでも避け続けるのはあたしにも無理だ！」
【私を握りしめ、『セットアップ』と申してください。そうすれば、私が貴女の力になれますので。】

デュンケルハイトにそう言われるが、リーハは何も言わない・・・いや、言えないのだ。

（人前で『セットアップ』などと叫ぶ！？そんな馬鹿なことが出来

るわけが・・・ないだろう！！は、恥ずかし過ぎるじゃないか！！）

そう、リーハは気心知れたもの（彼女のマスター、ヴァル、そしてヴァルのマスターくらいである）の前以外では『クールな神姫』を演じてしまう。ただの恥ずかしがり、という点もあるが。

【この際羞恥は放棄なさって下さい！おめおめと倒されてしまっても宜しいのですか！？】

「～～～～～っ！！でゅ、デュンケルハイト、絶対に録画・録音なんてするなよ！！」

【心得ております。】

「トイフェルデュンケルハイト、セット・アップ！！」

セットアップと叫んだ（最早この辺やけくそな気がしたのは気のせい）リーハを、光が包む。

その体を、彼女にとって馴染みのあるアーマーが包んでいく。

「・・・なるほどな、デュンケルハイト、中々粋な事をしてくれるな。」

【御褒めに預かり至極恐悦です。】

現在の彼女の姿は、『ストラーフＭｋ２』一式セットの、リアが『ＦＬ０１７リア　グリーヴァ』だった。

「・・・デュンケルハイト、グリーヴァで一掃する。いいな？」
【全ては貴女の意のままに。】
「そうか・・・。なら・・・殺戮の始まりだ・・・！」

グリーヴァをマウント状態から解放し、構える。

「はあぁっ！！」

そして、グリーヴァを横薙ぎに一閃。その範囲にいた機械は全て両断された。まるでバターを切り取るかのように・・・

「殲滅するぞ・・・！はーっはっはっはっは！！」

高笑いと共に敵を斬っていくリーハ。その様はまるで悪魔そのものだった。

数分後。

【・・・マスター、敵反応ロストしました。】

「そうか。・・・ここに長居するのはよくないだろうな。とにかく

まずは街へ移行。話はそれからだな。」
【そうですね。私もそれに賛成します。】

その後、後になのはからの報告を受け、調査のためすぐに数名の魔導師達がリーハがいたその地点に派遣されたが、そこにあったのは

まるでバターのように切られたような斬り跡が残された機械の残骸だけであった・・・

ＲＩＤＥ０２　リーハ、奮戦す（後書き）

今回、リーハがデバイス起動しました。

名前はドイツ語で『闇の悪魔』という意味です。ちなみに「グラーファイゼン」が『鉄の伯爵』だから、という感じでつけました。文法？気にしない方向で。

次回、ＲＩＤＥ０３　いざ行かん、機動六課！なのです！

ついでにおまけ。

ある理由で調べてみたのですが、エイルって・・・ヴァルキュリアの名前の一つだったんですね・・・。偶然つけてました・・・

ちなみに武装紳士の方ならご周知かと思いますが、アルトレーネの武器、スキルや固有レールアクションについての話なんですが・・・

北欧神話から来てる場合が多いんです。例としてあげるならば・・・

ゲイルスケイグル（アルトレーネ固有レールアクション）・・・「槍の戦」の意味を持つ、ゲイルスコグル（ゲイルスケグルでも可）から

ブリュンヒルデ（アルトレーネのゲイルスケイグル接続部分の一つ）・・・「輝く戦い」の意味を持つブリュンヒルデから

ランドグリーズ（バトルロンド、アルトレーネのカウンタースキル）・・・「盾を壊すもの」の意味を持つランドグリーズル（ランドグリーズでも可）から

レギンレイヴ（バトルロンド、アルトレーネのスキルの一つ）・・・「神々の残されたもの」「神々の娘」の意味を持つレギンレイヴ（

レギンレイヴルでも可）から
ニーベルング（アルトレーネリアパーツ）・・・「霧の国の人」の意味を持つ。北欧神話におけるニブルヘイム（冥界）。

他にもあります。・・・エイルがまさかヴァルキュリアの名前の一つだとは思わなかった・・・
「（エイル）私はヴァリュ・・・ヴァルキュリアの一人なのです！型番にも戦乙女型とついているのですよ！？」
「（ヴァル）普段ドジっ子だからそう見られないんじゃないのかな・・・？一部では牛丼とか言われてるよ・・・？」

ＲＩＤＥ０３　いざ行かん、機動六課！なのです！（前書き）

３話目です。ついに機動六課に向かうのです！

ついでにちょっとゲストを。そこはまぁ、天の声と思ってくだしあ。

ＲＩＤＥ０３　いざ行かん、機動六課！なのです！

ヴァルとエイルの目の前に突如として現れ、エイルの腰を抜かした女性。そしてその隣にいる、もう一人の金髪の女性。

彼女達二人が二人を援護した瞬間、戦況が一変した。

「だが、あえてその戦闘は省略させてもらうのですぅ！」

「酷いのです！！」

「仕方がありませんわ。こればかりはどうにもならないのですから。」

「だってあまりにもワンサイドゲームすぎるですよ！？アーモンドなんてわずか数分で全滅ですぅ！！」
「とは言っても省略は無いのです！！」
「戦いは数ですわ、姉様！！・・・言ってみただけですけれど。」
「もう知らないのです・・・。批判されても何も言わないのです・・・」

「あの、大丈夫でしたか？」
「え、あ、はい。大丈夫です・・・」

ヴァルは目の前にいるサイドポニーの女性に手を引かれているエイルを見ながら、返答した。エイルはまだ腰が抜けているようだ。

そしてヴァルは・・・混乱していた。

（ヴァル：え、えと、この人、空を飛んでた！？私たち神姫は空中ダッシュスキルがあれば出来るものなのに、そんなのがない感じで！？）

「あのー・・・」
「へぇあ！？は、はい、なんでしゅか！？」

混乱＋思慮状態の時に栗色のサイドポニーの女性に顔をのぞきこまれ、素っ頓狂な声を上げるヴァル。突然、ということもあって噛んでもいた。

「えーと・・・一緒に来てもらえるかな？色々とお話を聞きたいから。」
「え、あ、はい。その程度なら構いませんけど・・・それよりエイ

ルは・・・」

ヴァルはエイルを改めて見た。そこに映ったのは・・・

「あうあうあうあう・・・」

涙目で腰が抜けていて、再びへたり込んでしまっている、探していた本人だった。

「あー・・・怖がらせちゃったみたい・・・かな？」
「そうみたい・・・です。」
「じゃあ、いっしょに来てくれるってことで・・・いいかな？」
「はい。」

とりあえずこの人たちに敵意はない。そう考えたヴァルはついていくことに決めた。

「じゃあフェイトちゃん、私もう一つの次元震発生地点に行くね。」
「うん。気をつけてね、なのは。」

そして、なのはと呼ばれた女性は別の所に飛んで行った。比喩表現とかではない。飛翔したのだから。

（・・・やっぱり飛んだ・・・。どういう理屈でなんだろ・・・）

理由が分からなくてぼーっと彼方を見つめるヴァル。

「じゃあ、行こっか。ついてきて？」

フェイト、と呼ばれた女性に従ってヴァルは（腰抜け状態のエイルを引っ張り上げて支えてから）歩き始めた。

エイルは・・・面倒になったので足を引きずっていった。

（ヴァル：それにしても気になるのは・・・耳のイヤリング・・・。全ての武装が消えたのに、なんでこれだけ残ってるんだろう・・・）

ヴァルは耳のイヤリングについて考えてみたが・・・結局答えは出ずじまいだった。

「・・・ほえー・・・・」

所変わって、移動したその先。腰砕けから回復したエイルは建物を見上げて声を漏らしていた。ただ、「ほえー」と・・・・

「えっと・・・ここは・・・・？」

「ここは時空管理局の「古代遺物管理部　機動六課」。私やなのは・・・えと、さっき二人を助けた人・・・の友達が設立した部隊なんだ。私もここで働いてる。」

「機動・・・六課・・・ですか・・・」

相変わらず「ほえー」としか言わないエイルをよそに、ヴァルがフェイトと話を進めていく。ちなみに移動中の車で軽く自己紹介をしていた。ちなみにヴァルは咄嗟の偽名で「ヴァル＝フロントライン」と名乗った。エイルはヴァルが適当に「エイル＝ブリュンスタッド」とした。ちなみにばれてない。上手くヴァルが間を開けずに答えたからだ。

「じゃあ、ヴァル。私は報告に行くけど、ついてきてくれる？」
「あ、はい。分かりました。」

向かおうとした時にエイルのことを思い出し、エイルを呼んだ。エイルは呼ばれて向かおうとした時、見事に脚を縺れさせて『みゅっ！？』という声とともに転倒した。

一方、別行動のなのはは・・・

「次元震があったのはここだけど・・・何が・・・あったの・・・？」

次元震があった場所・・・つまり、リーハがいた場所に着いたなのはが目にしたのは、本来ありうることがない事態だった。

「ガジェットが・・・マーガリンを取る時みたいに斬られてる・・・」

リーハを襲っていた敵・・・ガジェット的にいえば惨劇の残骸だった。

「あの二人みたいにやったんじゃない、これは・・・質量兵器・・・？ううん、魔力があるからそうじゃない・・・じゃあ一体どうやって・・・」

既に行動することのないガジェットにより、なのはは調べてみる。見事と言わんばかりの斬り跡。自分の兄ですらここまでのことはできないだろう、と直感した。

「これは・・・はやてちゃんにすぐ報告しなきゃ・・・！」

なのはは踵を返し、すぐに六課へと戻っていった。

六課内。既に問題が起きていた。

「あれ？エイルは？」
「あ・・・もしかして・・・逸れた・・・？」

エイル、行方不明に。しかも気が抜けた・・・というか一瞬気を反らしたその瞬間だった。いなくなったのは。

「は、初めて来た人には広いとこだから・・・迷子になっちゃうよ！？」
「で、でででも一体どうすれば！？私だって初めてですから同じ

目に遭いかねませんよ！？」

パニックになるフェイトとヴァル。その打開策がなかった。

一方その頃エイルはというと・・・

「おおー・・・」

偶然迷い込んできた訓練室の真っ只中にいた。誰もいない訓練室。十分過ぎる広さのその場所に、ぽつんと立ちつくしていた。

「広いのです・・・。アリーナと比べたらどっちが大きいのでしょうか・・・」

ぼーっと突っ立ってきょろきょろと見て回るエイル。まるで子供のように。

「先輩たち、どこに行ったのですか・・・？やっぱり私・・・逸れたのです・・・」

結局立ち尽くすだけしかないエイルだった。

１０分後、フェイトが「一人で探しに行く、ヴァルはこの場所で待機」と決めて探しに来て、見つかった時にエイルが号泣したのはまた別の話。

ＲＩＤＥ０３　いざ行かん、機動六課！なのです！（後書き）

今回は私の武装神姫ＢＭ２から、
「イーダ型」のレイヴィー、
「マリーセレス型」のレスティ、
「アルトレーネ型」のルース
に友情出演してもらいました。ついでに言うとパロディ名言をも。

「（レスティ）まったく面倒だったのですぅ。急なお願いは困るのですぅ！」
「（レイヴィー）ホントですわ！・・・ああもう、本当なら今頃はお茶を楽しんでいましたわ！」
「（ルース）・・・皆さん、本当に申し訳ないのです・・・あそこだけは・・・」

次回はちょっと解説的なものをば。二人のちょっとしたデータも出ます。

ＲＩＤＥ０４　二人の今後（前書き）

今回は流していただいてもいい感じな回です。本当に説明回、みたいなものなので。

ＲＩＤＥ０４　二人の今後

「・・・以上が、今回の大規模な次元震の報告です。小規模な次元震については高町一等空尉の報告待ち、ということで。」
「了解や。フェイトちゃん、お疲れさん。」

部隊長室。そこでフェイトははやてに報告をしていた。ヴァルとエイルがいた次元震観測場所の出来事を逐一。
なお、ヴァルとエイルはフェイトの後ろにいる。エイルは・・・なんというか周りを忙しなくきょろきょろしていた。

「・・・ほんなら、ちょおお話があるんやけど・・・ええかな？」
「お話・・・ですか？」
「せや。・・・まぁ、簡単な検査を受けてもらうっちゅうだけなんやけど。」

ちなみに自己紹介はすませている。余談だが、初見でエイルがはやてに「タヌキ？」といったのがショックだったのか、数分「そう見えるんか・・・。私はタヌキなんか・・・」と落ち込む、という事態が発生し、フェイトとヴァルが二人で慰めるという光景があった。
なお、エイルは無自覚。

「検査・・・ですか・・・」
「さっきから気になっとるんやけど・・・そのヴァルちゃんでいう

イヤリングとエイルちゃんでいうチョーカーがな？デバイスのような気がして。」
「・・・デバイス？」

キョトンとするヴァル。ちなみにエイルは立ち寝を始めてしまっていた。なんとなく寝顔が可愛かったと、後にはやては語る。

「あ、デバイスについてまだ何も説明してなかったっけ。デバイスっていうのは私達が魔法を使うために必要なものなんだ。例えば・・・これ。私の場合はバルディッシュ。」
［Ｎｉｃｅ ｔｏ ｍｅｅｔ ｙｏｕ，Ｍｓ．］
「えと、これが・・・？」

フェイトの手元のアクセサリーのようなものを見ておっかなびっくりのヴァル。

「それと・・・私達と何の関係が？」
「ヴァルちゃんのイヤリングとエイルちゃんのチョーカーがデバイスじゃないか、って話があがっとんの。調べさせてもらえれば分かるんやけど。」
「は、はぁ・・・」
「で、そのついでに二人の魔力も測っちゃおう、って寸法や。」

なんか段取り良すぎるな・・・・と思うヴァル。

「で・・・元の世界に帰りたいんだよね？」
「はい、それはもちろん。」
「今ヴァルちゃん達の世界を調べとるんやけど、如何せん手掛かりがないもんやから時間がかかっとるんや。もし魔力があっての話やけど・・・民間協力者として六課に入ってくれへん？」
「はやて・・・人不足なのも分かるけど、誰彼構わずっていうのはちょっと・・・」
「ま、まあ、時間がかかるということなら、協力しますけど・・・」
「ホンマか？」
「けど、どこまでやれるかは分かりませんよ？」
「いや、そこは気にせぇへんよ。手伝うてもらえるだけでいいんや。」

元の世界が見つかるまでの協力、ということで話がついた。

で、ヴァルはイヤリングを、エイルは（ヴァルが）チョーカーを渡し、寝たままのエイルを背負いながら部屋を移動。魔力測定を行った結果・・・

ヴァル・・・B
エイル・・・C

という結果が出た。

そして、イヤリングもチョーカーもデバイスということが判明した。だが、それがインテリジェンスデバイスなのか、ということが分からないのだ。ＡＩが積まれている形跡はあるが、喋らないのが原因だ。

「ヴァルのイヤリングも、エイルのチョーカーもデバイスって結果が出たみたい。けど・・・これがインテリジェンスと言っていいのかが分からないみたい・・・」
「インテリジェンス？」
「・・・ほえ？デバイスとかインテリジェンスとか・・・もう全く話が分かんないのです～・・・」

エイルは仕方ないとして、ヴァルは疑問顔でフェイトに聞く。

「インテリジェンスっていうのは、さっき見せたバルディッシュみたいにＡＩを積んだデバイスのこと。デバイスと対話が出来るから扱いやすいように思えるけど、性格があるから逆に使用者を選んじゃう、ということが問題かな？」
「は、はぁ・・・（なんか神姫と同じ様な感じだなぁ・・・）」

現在通路を歩いている三人。まだなのはが仕事中、ということでフ

ェイトが案内しているのだ。なおなのはは現在はやてに報告中。

「で、今度は実際に戦ってもらうけど・・・いい？」
「えっと・・・誰とですか？フェイトさんだと確実に勝ち目ありませんよ・・・？」
「私はいわゆる試験官のようなもの。訓練室でガジェットと戦ってもらうだけ。」
「ガジェット・・・ああ、あのアーモンドみたいなあの機械ですか？」

もうアーモンドで定着しているヴァルであった。

「アーモンド・・・まぁ、それで合ってるかな？それと戦ってもらうから。」
「はい、分かりました。」
「じゃあ、どっちから始める？」
「・・・私から行きます。」

先に行くといったのは、ヴァルだった。

「先輩・・・大丈夫ですか・・・？」
「大丈夫・・・なはず。けど・・・やるしかない・・・！」

その眼に諦めの色が浮かぶことはなかった。

ＲＩＤＥ０４　二人の今後（後書き）

次回はヴァル、エイルがバトります！相手はガジェット。

ヴァルは単騎奮戦し、エイルは局の伝説になる！？

お楽しみに！！

ＲＩＤＥ０５　ヴァル、孤軍奮闘。エイル、奇跡を起こす戦乙女に。（前書き）

ガジェットと模擬戦します！一体何が起きるのか？・・・特にエイルに。

それは本編で！

あと後書きでアンケートとります。

ＲＩＤＥ０５　ヴァル、孤軍奮闘。エイル、奇跡を起こす戦乙女に。

模擬戦用の場所でヴァルは一人、立っていた。

『ヴァル、準備はいい？』

「えーと・・・デバイスの起動って一体どうやってやるんですか？」

インカムから聞こえてくるフェイトの確認に、ヴァルはある質問をした。単純な質問、デバイスの起動だ。

『簡単だよ。デバイスと『セットアップ』と言うだけ。名前決めてる？』

「ええ、まぁ・・・。では・・・行きます！」

耳から外したイヤリングを握りしめ、ヴァルは言った。

「ムーンエンジェル、セットアップ！！」

［Ｇｅｔ　Ｓｅｔ，　Ｒｉｄｅ　ｏｎ！］

右手を掲げた彼女を、光が包む。

光の中で、彼女の纏うものが変わっていく。

光が消えたその所にいたのは、デバイスセットアップが完了したヴァルだった。

［完全武装完了（フルアーマーコンプリート）。］

「・・・すごい・・・」

彼女が纏っていたのは・・・

頭部：ヘッドセンサーユニコーン
胸部：Ｆ１０１６　チェストガード
腕部：Ｆ１０１６　Ｌガントレット
腰部：ヴァリア・シオン
脚部：ＬＧパピオン
足：ロントラシューズ
背部：ＲＵ・シンペタラス
盾：ディコ・シールド

だ。

「・・・まさかこの一式だなんて・・・」

『ヴァル、準備はいい？』

「はい、いつでもいけます！！」

フェイトがセッティングをし、後はスタートを待つだけとなるヴァル。目の前に表示された画面の内容を見て、確認するだけだ。ターゲットはガジェット、その数１０。

『じゃあ・・・スタート！』

フェイトのスタート号令。

「ムーンエンジェル、左にアルヴォＰＤＷ、右にライトセイバーを！」

［アルヴォ、ライトセイバー展開。］

感覚で分かる。こういうふうにすれば武器が呼び出せるということを。ヴァルは流れるように左手にアルヴォＰＤＷを、右手にＭ８ライトセイバーを呼び出した。

「いきます！！」

ヴァルは目の前にいるガジェット３体の所に駆けていった。

「あ、あれと戦うんですか！？無理なのです！絶対勝てないのです！！」

エイルはかなりテンパった様子でフェイトに文句的なものを言っていた。

「多分大丈夫だと思うよ。魔力ランクに合わせて測定するから。」
「でもでも！流石に無理なものは無理なのです！！」

それでも必死に食らいつくエイル。やりたくないの一心が目に見えていた。

「おー、やっとるなー。」
「あ、はやて。なのはからの報告は？」
「ちゃーんと聞いて、まとめ終わっとるよ。ちょーっと気になる所もあったけどな。お、５つ目をやっつけたみたいやな。」
「そうだね。ところではやて、その気になる所って？」

ヴァルを見ながらフェイトが聞く。

「なのはちゃんからの報告やとな？ちっさい方の次元震のとこに現れたガジェットが、まるでマーガリンを容器から取り出したように斬られとったらしいんよ。最初の方はヴァルちゃん達が倒してたみたいに、レンズが壊れとったみたいやけど、途中から戦い方を変えた、というのがなのはちゃんの推測やね。魔力反応もあったことやし、多分ヴァルちゃんやエイルちゃんみたいな次元漂流者やろね。」
「そっか。それで、なのはは？」
「別の所で教導中や。」

二人の話を小耳にはさむ感じで聞くエイル。しかし、理解は出来て

いなかった。

一方ヴァルは・・・

（ヴァル：敵ターゲットは総数１０、倒したのは８・・・残り二体。どう倒すべきだろうか・・・？）

建物の陰に隠れ、攻撃をやり過ごしながら思考を張り巡らせる。

（ヴァル：アルヴォは残弾がギリギリ、例え撃ったとしてもかき消される可能性が大きい・・・。レーザーソードも使えるかどうか・・・。・・・なら・・・！）

ついにヴァルは行動に出た。

「いきますよーっ！」

建物の陰から出て来た時、背部のシンペタラスがなくなっていた。

「お、ついに動くみたいやね。・・・おろ、背中にあったのがなくなっとるね・・・」
「・・・どこに行ったんだろ・・・？」

フェイトとはやてがシンペタラスを探す。しかし見当たらない。

「・・・あ、あそこです！」

エイルが指さして言った。その先にはガジェットがいて、さらにその後ろには・・・

「あれ、ヴァルちゃんの背中にあったやつや！ううん、形が違っとる！」

「まさか、あれって独立して動くもの！？それともフォトンランサーみたいなもの！？」

滑らかな動きでガジェットに迫るシンペタラス・・・いや、その形は既に違っていた。

「あれは・・・ラファールなのです！」

「エイルちゃん、知っとるの？」

「はい、何度も一緒に戦っているので分かるのです。もしかしたら・・・最後の賭けに出たと考えるべきなのです。」

エイルの話の間に一つ、ガジェットが落ちた。

（ヴァル：これが最後の一機・・・！これで決める！）

ラファールはヴァルに接近して、彼女の近くで速度を落とした。ヴァルはジャンプし、ラファールに飛び乗る。

「これこそ・・・天駆ける天使の騎馬！グランニューレっ！！」
［レールアクション”グランニューレ”、始動。］

ヴァルはガジェットに向かって突撃していく。ガジェットもレーザーを撃ってくるが・・・

［オートプロテクション、展開。］
「効きません！」

全て防いでしまう。

そして、ガジェットと衝突した。突っ込まれたガジェットは方物線を描いて飛んで行き、墜落した地点で爆発した。

［”グランニューレ”終了。敵の殲滅を確認。］
「そのようですね・・・」

肩で息をしながら、中央でラファールから下りるヴァル。同時にブザーが鳴った。

『ヴァル、上がってきて。』
「はい。」

フェイトからの指示を受け、ヴァルは上に上がった。

「凄かったなぁ・・・ヴァルちゃん。あんな大技隠しとったとは思えんわなぁ・・・」
「うん・・・。あ、結果が出たよ。」

表示された結果は・・・

基礎戦闘技能：Ｓ
属性：無
戦略構築能力：ＡＡ＋
空戦適正：Ａ
陸戦適正：Ａ
魔力測定値：Ｂ

瞬間最大魔力観測値：Ａ
スキルレベル
グランニューレ：Ａ＋
一刀両断・白：未測定
ディヴァインソード：未測定
ｕｎｋｎｏｗｎ
総合：Ａ

だ。

「・・・最後のｕｎｋｎｏｗｎがめっちゃ気になるんやけど・・・」
「けど、彼女が凄いってことも分かったね・・・。魔力測定値以上のスキルレベルの技もあって、戦技適性はどちらもＡ・・・」
「あ、次はエイルちゃんな？下降りてくれんかな？」
「ふえっ！？え、あ、その、お、お断りさせてもらいたいのです・・・」
「却下な？」

えうー・・・と言いながら涙目でエイルは下に降りていった。途中でヴァルとすれ違いヴァルは疑問符を持って階段を登ってきた。

「えーと・・・エイルに何かありました？」
「んとな？ちょーっとお断りを・・・なんて言ってたから却下したっただけやで？」
「・・・それは・・・泣きますよ・・・」

哀れ、と思ってヴァルはエイルに心の中で合掌した。

「こんなの無理ですよぉ～・・・・」
『エイル、準備はいい？』
「何の準備も出来てないのですぅ・・・心の準備も・・・・」
『あ、あはは・・・』

返ってきた泣き言に苦笑するフェイト。

『エイル、ここはぐっと我慢してやってみて？終わったらきっと何かいいことあるから。』
「うぅ・・・はいなのです・・・」

ついに諦めを悟ったか、エイルは頷いた。

「・・・もうこうなったらどうにでもなれなのです！！ヴァイスヴァルキリー！セットアップ、なのです！！」
［Ｇｅｔ　Ｓｅｔ，　Ｒｉｄｅ　ｏｎ！］

ヴァルと同じ様にエイルの体も包まれる。違うのは、右手を掲げていない、ということ。チョーカーだからそこは何もしないで済んでいたのだ。

そして、彼女もまた、姿を変えた。その姿は・・・

頭部：フレイアヘルメ

胸部：ヴァイスプレスト
腕部：ヴァイスカフス
腰部：名称不明な長めのドレスっぽいスカート
脚部；ヴァイスグリーブ
背部：ニーベルング
その他：ヴァイスチョーカー、ヴァイスシュルター

だ。何故かスカートがあるが、それは不明だ、という話。

『じゃあ・・・スタート！』
「か、かかってくるのです！！」

ジークリンデを右手に呼び出し、構えるが・・・

「・・・」

ジリ。

「・・・（うるうる）」

ジリ。

「・・・やっぱりダメなのですぅ～っ！！」

逃げた。それはそれはもう、脱兎のごとく。

なお、その光景にはやてはずっこけたとかどうとか。

「・・・エイルちゃん、開始早々敵前逃亡って・・・ある意味流石やとしか言いようがないやね・・・」
「しかも相当速いよ？普通の人が出せるかどうかの速度で走ってるし・・・あ、建物の中に入った。」
「エイル・・・」

はやてとフェイトは苦笑いし、ヴァルは手すりに手を突いて頭を垂れていた。

「・・・あれ？」
「なに、はやて？」

ふいにはやてが何かに気付く。

「・・・なぁ、フェイトちゃん？ガジェットって確か、魔力値Ｃなら5体だったはずやよね？」
「う、うん。そうだけど・・・」
「あたしの身間違いやなければ・・・あのフィールドに軽く３０体くらいおらへん？」
「・・・あ、あれ！？もしかして設定間違えた！？」

「こっ、この状態を脱出できる武器はないのです！？」
［My recommendation is Sturm und Drang.］
「しゅ、シュツルムウントドランク！？あ、あれはバズーカなのです！！」
［No, problem. I assisting for you.］

ヴァイスヴァルキリーがアシストをする、ということでエイルは渋々・・・というかかなり嫌そうに戦うことにした。

「・・・行くのです・・・ターゲットは・・・どこなのです？」
［Target, lock on. Please fire.］
「分かったのです！いっけー！なのです！」

放たれた魔力バズーカは綺麗な放物線を描いてガジェットの群れに落ちていく。そして、綺麗な白色の爆風を作り上げた。

「ほえー・・・当たったのです・・・」
［Target's lock come! Must run away!］

「せ、戦略的撤退なのです！！」

建物から飛び出したエイルは空中を走って別の建物へと逃げ込んだ。
ついでにその建物の裏側を破壊してさらに逃げ、また隠れた。

「エイルちゃんて、なかなか策士やね・・・。遠距離から魔力砲撃って、気付かれたら逃げてまた隠れて・・・撹乱するの得意なんか？」

「いえ、ただの逃げ腰になってるだけだと・・・」

と、ヴァルが返した時だった。『ふえぇ～ん！』という鳴き声が聞こえたのは。

「か、囲まれちゃったのですぅ！！こ、今度こそピンチなのですか、これ！？」

［Ｍａｓｔｅｒ，　Ｉ　ｓｕｇｇｅｓｔ　ｔｈａｔ　ｙｏｕ　ｕｓｅ　Ｇｅｉｒｓｃｏｇｕｌ．］

「・・・もう、やるしかないのです？！」

［Ｙｅｓ．］

淡白に返されるエイル。もうやけっぱちになった彼女は・・・

「もうこの際どうなっても知らないのです！凄いのいっちゃうので

す！！」

［Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ，　Ｃｏｄｅ＝ｖａｌｋｕｒｅ．］

機械的なヴァイスヴァルキリーの声に呼応するように、ニーベルングが展開し、姿が変わる。

モード・オブ・ヴァルキリー、フリューゲルモード。今のヴァイスヴァルキリーの姿である。

［Ｒａｉｌ　Ａｃｔｉｏｎ．］

ジークリンデと左副腕の盾『ブリュンヒルデ』を合体させて、一本の槍にする。そして、それを投げる体制に持ってきて・・・

「ゲイルスケイグルっ！！」

投げた。ただ・・・本来のゲイルスケイグルはブリュンヒルデを喫先として投げるのだが・・・

［Ｍａｓｔｅｒ，　ｄｉｒｅｃｔｉｏｎａｒｅ　ｒｅｖｅｒｓｅ．］

「えっ！？」

何を混乱したか、「ジークリンデを穂先として」投げてしまったのだ。

「あーっ！？ちょ、ちょっとタンマなのです！ミスしちゃったのです！なかったことにしてほしいのです！！」

しかしゲイルスケイグルは止まらない。ガジェットにか擦りもしないまま残り多数の中央に落ちたその槍は・・・

盛大に爆発した。

「きゃうぅっ！！」

爆心地近くにいたガジェットは当然全壊。投げたエイルにもかなり強い風圧が掛かっている。

「ゲ、ゲイルスケイグルに爆発効果・・・！？」
「・・・凄いもんを見てもうた気分や・・・・」
「こんなことって・・・あるんだね・・・・」

フェイトの前にある画面には『ガジェット、全滅』の文字があった。
あの一撃で残っていたガジェットが全て壊れたのだ。

「・・・はやて、結果が出たよ・・・」
「ど、どれどれ・・・ってなんやこの結果!?」

はやてが驚愕した結果。それは・・・

基礎戦闘技能：C
属性：爆
戦略構築能力：D
空戦適正：C
陸戦適正：C
魔力測定値：C
瞬間最大魔力観測値：S
スキルレベル
ゲイルスケイグル：SS
ランドグリース：未測定
レギンレイヴ：未測定
総合：計測不能　エラー　計測不能

だった。

「あ、あの槍にあんなスキルレベルがあったなんて・・・思えんわ・・・」
「う、うん・・・」

この日、エイルは『時空管理局史上、最も異常な数値を叩き出した次元漂流者』として絶対に塗り替えられることのない伝説として名を残した・・・

おまけ

「あ、なんか運数値も出てるで？」
「・・・運：ＳＳＳ・・・ヴァルでもＢだったのに・・・」
「・・・もうエイルちゃんって規格外なんやね・・・」
「・・・ドジが幸運って・・・」

はやて・フェイト・ヴァルが結果を見て愕然としていた・・・

ＲＩＤＥ０５　ヴァル、孤軍奮闘。エイル、奇跡を起こす戦乙女に。（後書き）

次回はフォワードと初めて会います。そしてお待ちかね？のレーネさんと言ったらなネタが。

アンケートですが、ＳｔＳでギンガが出てくる頃に１～２人ほどキャラ追加しようかと思います。

それで、どの神姫がいいか、というのをまず募集します。

ただし、条件として『武装神姫　ＢＡＴＴＬＥ　ＭＡＳＴＥＲＳ　Ｍｋ２』に参戦確定している神姫に限ります（現状況ではムルメルティアまでが確定してます）。

期間は１２月９日まで。感想でお願いします。

ＲＩＤＥ０６　神姫二人、食堂初体験！そしてフォワードと初会合（前書き）

今回はいつもの予定を前倒ししての更新なのです。後書きで募集の結果発表を行いますなのです！！

ＲＩＤＥ０６　神姫二人、食堂初体験！そしてフォワードと初会合

「フェイトちゃん、どう？」
「なのは。教導は？」
「休憩中。その時にさっき助けた二人がガジェットを相手に模擬戦してるって聞いたから見に来たんだけど・・・」

フェイトが模擬戦の後始末をしている時、なのはが来た。丁度休憩にした、ということ出来たらしい。

ちなみにはやてはヴァル・エイルを連れて食堂まで案内した。エイルが戻ってきた時、盛大に腹が鳴ったものだから、お昼にしよう、ということになったためだ。

「模擬戦は終わったんだけど・・・」
「・・・どうしたの？」

苦笑いをするフェイトになのはは改めて聞く。

「・・・結果がね？ヴァルは普通だったんだ。」
「ヴァル？えーと・・・どっちの子だったっけ？」
「えっと、真っ白な子、って言った方が早いのかな？」
「・・・あ、あの子か！」

どうやら「真っ白な子」で通じたらしい。

「それで、ヴァルちゃんは普通だったんだよね。じゃあもう一人は？」

「・・・見てもらった方が早いかも。」

フェイトはなのはにエイルのデータを見せた。

「・・・これ、ちゃんとやった結果なの？」

「ガジェットの数間違えて出しちゃったんだけど、それでも結果はちゃんと出るはずだよ？」

「適正ＣでスキルがＳＳ・・・局の中でも聞いたことないよ・・・？」

一方。

「ここが食堂や。」
「広いですね・・・」

食堂を案内される二人。ヴァルは素直に感心しているが、エイルは・・・

「・・・おおぉ～・・・」

目が輝いていた。目の前にあるご飯がおいしそうに見えたから。それ以外に理由はない。

「で、どうするん？何か食べたいものあったら言うてな？」
「牛丼食べたいのです！！」
「エイル、落ち着いて！ちょっと意地汚いよ！すいません、こんないきなり・・・」
「ええよ～。ヴァルちゃんはどうするん？」

はやてが聞いた瞬間、エイルが咄嗟に言った。ヴァルは謝るが、はやては気にしないといった感じでヴァルにも聞いた。

（エイルが「牛丼が～」といったその理由は、ちゃんとあります。バトマスでレーネさんイベントを進めていけば理由が分かります。きっと　ｂｙ作者）

「私は・・・お任せします。選んでいたら時間かかっちゃうので・・・」
「ほんなら、私が勝手に決めるけど、ええか？」
「はい。」

「おおぉ～っ！！」

目の前にある牛丼に目をキラキラさせるエイル。

「ヴァルちゃんはナポリタンやで。・・・これでよかったん？嫌なら私のと取り換えっこするけど？」
「いえ、大丈夫です。」

エイルは牛丼を見て・・・いるだけ。最早鑑賞状態。

「エイルちゃん？もう食べてもええんやで？」
「いえ・・・もうちょっと・・・じっと見てます・・・」

牛丼をじーっと見つめるエイル。それを苦笑しながらはやてはヴァルにナポリタンを渡す。

「あ、どうもありがとうございます。」

目の前に置かれたナポリタンを、至極当然のように、上品に食べ始めるヴァル。

「エイルちゃんも食べてええんやで？・・・というかいつまで見とるん？」
「で、では・・・いただきますなのです・・・！」

なんとなく戦々恐々としながら牛丼の丼を持ち、食べ始めるエイル。

二口ほど食べて・・・箸が止まった。

「エイルちゃん？どないしたん？」
「・・・お・・・お・・・」
「お？」
「おいしいのです・・・！」

目が輝いているエイルにまたはやては苦笑するのみ。ヴァルも苦笑いしていた。その後加速して食べ始めたエイル。勢いは素晴らしいの一言に尽きる。

そしてヴァルがナポリタンを半分食べたくらい（この時点で何故か腹八分目な感じがした）に。

〈お腹空いたねー、ティア。〉
〈そうね。なんとなくなのはさんの共同がいつもより大変だった気がするわ・・・〉

3人の少女と1人の少年がぞろぞろと入ってきたのだ。まだヴァルが視認できるくらいだが。

「あ、なのはちゃんの教導が終わったみたいやな。せや、紹介せなな。」
「あの、お昼が終わってからでも・・・」
「あっちが気付くってこともあり得るんやで？私が話しかけんでも。」
「あ・・・」

それを失念していたヴァル。エイルは相変わらずがっついていた。牛丼を。美味しそうに食べてるからいいか、と流すくらいに。

「・・・あ、部隊長！」

そして、自分の食事を持っていた青髪の少女がはやてに気付いた。

「部隊長もお昼ですか？」
「せやよ。みんなもお疲れさん。今日もまた一段ときつい教導やった？」
「はい・・・。あ、あの、部隊長？」
「ん？」
「そちらの二人は・・・？」

オレンジ髪の少女がヴァル達に気付いてはやてに聞いた。その時のヴァルは・・・

（ヴァル：え、ええっ！？あ、アーティル型の声と同じ！？どういうこと！？）

パニックになっていた。

「ああ、紹介せなな。というか本人は皆が食べ終わってからでも、って言うてたけど。」
「は、はぁ・・・」

頭の中で盛大にパニックになっているヴァルと、牛丼を相変わらずがっついている（とはいえ、減っている量はそんなに多くはないが）エイルをよそに、はやては目の前にいる４人と話していた。

「まずはこっちの子な？彼女はヴァル＝フロントライン。一応言うておくけど陸戦Ａで、今度から民間協力者となってもらった次元漂流者さんや。」

「えと、ヴァル＝フロントラインです。よろしくお願いします。」

「わぁ・・・礼儀正しい人・・・」

「陸戦Ａ・・・つまり、私達の上のランク・・・」

ピンク髪の少女がヴァルの行動に感嘆し、オレンジ髪の少女ははやての言葉を反芻するように言う。

「で、さっきから牛丼をがっついているこっちの子はエイル・・・えっと・・・ぶりゅん・・・何やったっけ？ブリュンスタッド？ブリュンスタット？・・・あれ？」

はやては混乱した。エイルの名字に混乱しているのだ。最後が「ド」なのか「ト」なのかで。

「えと、『ブリュンスタッド』です。」

「あ、そか。ありがとな、ヴァルちゃん。改めて・・・彼女はエイル＝ブリュンスタッドや。・・・ごめんなエイルちゃ・・・って聞

いとらんか・・・」

エイルは相変わらず牛丼を（ちょっとずつだけど）がっついていた。無論、夢中になっていて聞いてすらいない。

「えとな、彼女も同じく今度から民間協力者となってもらう次元漂流者さんや。陸戦C・・・なんやけど・・・」

「部隊長？」

言葉が最後に濁るはやてに、赤髪の少年が疑問を伴って聞いた。

「・・・多分、管理局の伝説になるかもしれんのや・・・」

「伝説・・・ですか？」

赤髪の少年が恐る恐る、といった感じで聞く。他の三人も同じ感じが雰囲気から見て取れた。

「・・・彼女な？魔力ランクもCなんやけど・・・持っとるスキルが・・・SSなんよ・・・」

「え・・・SS！？」

「びっくりやろ・・・？ヴァルちゃんはAでスキルも同じくらいなんやけどね。魔力はBなんやけど、それを補う戦闘スキルを持っとるんやからな、問題はないんや。」

「た、確かに・・・」

「それに・・・総合ランクが測定不能やったんや・・・」
「そ、測定不能!?」

全員がエイルに驚きを隠せない。というか・・・そんな凄い人と目の前で牛丼に夢中になっている人が一致しない、というのが原因だが。

「ああ、そやそや。皆も自己紹介したってや。ヴァルちゃん、ごめんな?ぽかんとさせてもうて。」
「え、あ、その、そういうのは慣れてますから・・・」
「じゃあスバルからな?」

スバルと呼ばれた少女が頷いた。

「えと、スバル・ナカジマ二等陸士です。ランクは陸戦B、ポジションはフロントアタッカーです。」
「ティアナ・ランスター二等陸士です。ランクは陸戦B、ポジションはセンターガードです。」
「エリオ・モンディアル三等陸士です。ランクは陸戦B、ポジションはガードウイングです。」
「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。ランクは陸戦C+で、ポジションはフルバックです。」
「改めて、よろしくお願いします。」

ヴァルも返す。しかし・・・

「・・・エイル、一旦食べるの止めて挨拶しよ？」
「・・・んむ？」

この超天然少女・・・エイルは今の今まで牛丼を食べていたのだった・・・

おまけ

「あ、二人のガジェット模擬戦のデータあるんやけど、見たい？」
「見せてもらえるんですか！？」
「スバル！・・・すいません、出来ればでいいのですが・・・」
「ええよええよ。んじゃ、再生っと。」

ヴァルの場合・・・

「わぁ・・・凄い・・・」
「的確にガジェットを撃ってる・・・精密さが桁違いだわ・・・」
「あっ、見てください！背中にあったのがなくなってます！」

『これこそ、天駆ける天使の騎馬！グランニューレっ！』

「わぁぁ・・・」

ヴァルの戦闘データは好評だった。

エイルの場合・・・

「・・・別の意味で凄いね、ティア・・・」
「・・・そうね・・・」

スバル・ティアナが呆れるのも無理はない。映っているのは必死になって逃げているエイルだからだ。

「あ・・・建物の中に隠れて・・・な、なんですかあれ!?」
「ミサイル!?ううん、バズーカ!?あれ質量兵器じゃないんですか!?」
「違うで?あれ、質量兵器に見せかけた魔力砲なんよ。」
「今ので・・・えーと・・・5体ぐらい撃墜したみたいです・・・」

そして追いつめられてから。

『ゲイルスケイグルっ!』

「ぶ、武器を投げた!?あれって槍だよね!?投げちゃって・・・ってええっ!?」
「ば、爆発した・・・!?」

最後の『ゲイルスケイグルが爆発した』シーンで全員が絶句した。

なお、最大瞬間魔力が叩きだされたのもこの瞬間だったりする。

「な？エイルちゃんはもう規格外って言ってもおかしくないやろ？」

「は・・・はは・・・」

はやての言葉に苦笑いで返す他なかったティアナであった・・・

ＲＩＤＥ０６　神姫二人、食堂初体験！そしてフォワードと初会合（後書き）

まずは募集の結果発表です。

追加希望のあった神姫は・・・

型番　ＤＩ／ＡＩＰ－００１Ｘ２
神姫名称　戦乙女型アルトアイネス（ＭＭＳ　Ｔｙｐｅ　Ｖａｌｋｙｒｉｅ　ＡＬＴＩＮＥＳ）（ＣＶ：水橋　かおり）

型番　ＯＳＡ１１１
神姫名称　ハイスピードトライク型アーク（ＭＭＳ　Ｔｙｐｅ　ＨｉｇｈＳｐｅｅｄ　Ｔｒｉｋｅ　ＡＣＨ）（ＣＶ：堀江　由衣）

です！あと、敵にも参戦要望がありました。ミミック（ＣＶ：喜多村　英梨）です。あの「うぅぅぅぅぅぅきゃぁあああああっ！！」なあいつらです。

次回は原作４話あたり。ファースト・アラートまであと少し。

「あれ？リーハは？」と思った方。彼女ももうすぐカッコイイ現れ方をしてくれますよん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3847x/

武装神姫 Lilycal Strikers

2011年12月10日01時52分発行